

書評

ボヴァ・エリオ著
『中島敦文学論——植民地と他性』

（人文書院、2022年7月）

閻 正 昊

広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程後期

[Book Review] Elio Bova, *Nakajima Atsushi's Literature: Colony and Alterity*
(Jinbun Shoin, Jul. 2022)

YAN Zhenghao

一、本書の概要

従来の中島敦論において植民地文学を視座としたものは少なくないが、作家の植民地体験からその位相をいかに読解するかは、長く問い続けられてきた問題である。「外地」を舞台とした文学が、近代作家の中島敦（1909～1942）の代表作の一部を構成しているが、植民地体験は彼の成長にどれほど影響し、またその作品における自己と他者の軋轢にどのような啓発をもたらしたのか。こうした中島植民地文学研究における問題点をめぐり、本書は「植民地における文学的経験を見渡しつつ、特に朝鮮と南洋体験の影響が読み取れる一部の作品の位相を、中島文学の総体において捉えることを第一義とした研究」（10頁）を旨として、物語の他性を掴む試みとして模索している。

7章と補遺1章で組み立てられた本書は作品論を主とし、横浜高女教諭時代の「虎狩」をはじめとして、南洋時代の「環礁」「ナポレオン」「マリヤン」などの作品を読解する中で、中島の自己と他者認識から、その文学における植民地空間の様相を明晰にしようとする。本書所収の諸章が、特に作品の創作時間順に従わず、「中島文学に成立する〈己と他者〉の把握を試みながら、作者の中期から後期にかけて、これらの〈域〉との接触の表現がどのように

形成されていくか」(10頁)と問題を提起している点に、著者の中島敦研究の新しい視点を探求する努力が見いだせる。以下にまず目次を挙げる。

図版・画像リスト

序章 主旨と構成

第一章 南洋日本文学の戦後表象——「環礁」観を視座として

第二章 〈物〉と〈名〉の二分法——「虎狩」という分水嶺

第三章 他性、記憶と忘却——「木乃伊」との邂逅

第四章 他者とのロールチェンジ——「ナポレオン」、帝国の境界までの旅

第五章 島民像と他者依存の自己規定——「夾竹桃の家の女」

第六章 他者の服——「マリヤン」という鏡

第七章 「私」の中の「寂しい島」——寂しさと運命観

補遺 「古譚」——「狐憑」・「木乃伊」の構想期再考

結章

南洋群島滞在期の年譜

あとがき

引用文献／絵・彫刻関係／参考文献

初出一覧

索引

第1章では、一般の読者にとって「いわばマイナーの作品にあたる」(21頁)中島のミクロネシア体験を語った短編集「環礁」を対象に、作品の南洋文学における位相と「南洋群島の日本語文学」と呼び得る分野の内実などの問題を検討している。本章ではまず、これまで幅広く考察されてきた中島の南洋行について、「健康状態や経済的理由」という外因と、「〈南〉への傾倒、志向」や文学活動のための時間の確保などの内因(22頁)で、先行論に問われている日米開戦によって最前線となった南洋への赴任の動機を解釈している¹。

それに続いて「環礁」の位置づけを分析するにあたり、諸篇の作品をめぐる詳しい解説を行わずに、代わりに作家論的・作品論的なマクロ・アプローチを皮切りに、ミクロネシア日本文学、そしてそのジャンルにおける存在の

在り方から問いはじめている。さらに著者は、南洋日本人作家である中島の「環礁」が南洋日本文学の何を代表し、かつ表現しているのかという問題をめぐって、ミクロネシア日本文学における「環礁」が、「千冊のなか（から切り離された）の一冊」と「千冊のなか（へ）の一冊」（33頁）²という二重の働きを仄めかすと指摘している。

9節から成る第2章では、中期作品の「虎狩」の表現の成立経緯および物語で語り手である「私」と朝鮮人少年の趙大煥との交際をめぐって、「私」と趙の共通点をめぐる作為的展開から二人の関係を考察する。本章では節ごとに、植民地学校という二重になった空間で「私」と趙と出会い、また少女と金魚を媒介とした二人の関係と、学校の内外における二人のアイデンティティによる〈属性〉、虎狩りの前後に見られる宗主国民の「私」と被植民者の趙の感情の交流などの多方面からの視点を根拠として、作家中島の被支配者認識の変貌過程を捉えることが、作品の意義であると著者は説いている。

一方、被植民者の趙を主人公にした「虎狩」では、日本人である「私」が脇役になり、さらに虎狩りの現場で映し出された少年趙の「苦悩に後景している植民地への嘔吐、嫌悪を強く感知させる描出」（53頁）では、二人の関係において植民地における支配・被支配関係が顛倒し得る可能性を示している。Nobuko Yamasaki が説いた中島文学における帝国日本の植民地体制の固有の不平等性（inherent inequities）への対応は³、本章では植民地という次元で共生している植民者の「私」と被植民者の趙が、「二人だけのある種の共通性を維持させるセーフ・ゾーン」（38頁）を模索しようと努力しつつも、被植民者の心底に寄寓している植民地支配への嫌悪が、無視できない存在になったと指摘する。

第3章は、「古譚」所収の「木乃伊」をめぐり分析である。本章では脱稿の時期という問題を劈頭に提起し、それに継いで作品の展開における木乃伊そのものとの同定アイデンティフィケーションを論説のはじめとする。本作は題材によると植民地文学とはいえないが、中島の南洋体験が作品の背景として見えてくると論じられている。また、物語で描かれているペルシア帝国の辺境が、「日本帝国の一部となってまだ日も浅い辺境地帯の前哨、植民地ミクロネシアでの中島の経験を忠実に映り出している」（65頁）と、古代ペルシアを舞台とした作品の奥に潜んでいる「南洋背景との文脈」（66頁）の成立が読み取れると著者は示唆している。

第4章では、「環礁」所収の「ナポレオン」を中心に取り上げる。本章では、作品が民俗学者として南洋で活躍した土方久功（1900～1977）の日記から得た影響を対象に、日記の原文を作品の文脈と比較する視座から読み込まれている。国立民族学博物館に寄贈された土方の日記や草稿などの資料は、劣化が進んでいるため2010年から全ページがデジタル画像化された⁴。著者は「ナポレオン」の物語が、土方の『南方離島記』にあるヘレン礁および少年ナポレオンの描写が主な素材となっている」（87頁）という結論を出し、さらに物語を解剖し、少年ナポレオンの異種性が重層化された文脈により様々な形で表現されたと指摘している。一方、物語には〈環境を克服する〉というモチーフが織り込まれ、中島のいう「環境と時代に『適応する（といふより之を克服する）』こと」（107頁）の難しさが示されていると指摘する。

第5・6章では、著者が「環礁」所収の南洋植民地の「島民」像を描いた「夾竹桃の家の女」と「マリヤン」を対象に、物語化した先住民像の「虚像」と「実像」を捉える。第5章では、「夾竹桃の家の女」をフランス作家ピエール・ロティ（Pierre Loti, 1850～1923）の『ロティの結婚』（*Le Mariage de Loti*, 1880）と比較して分析している。著者はロティ作に関心を持つ中島が、「夾竹桃の家の女」には「午後の水浴をしている裸体の娘たち」という性的な場面で、『ロティの結婚』で登場した近似場面と同じく『『文明人』対『原始人』のフレーム化』（120頁）を果たしているが、その裸体が性的魔力のないイメージであるという相違点があると、作品の文脈における「性的冒険」の欠如を示唆する。

第6章では、かつて東京の女学校で二、三年留学した経験を持つ現地人のマリア・ギボン（Maria Gibbon, 1917～1971）をモデルにした「マリヤン」を、時代背景、作品構造や人物像など多岐に渡る視点から読解する。本作は南洋で会った実在の人物をモデルにし、直感的に植民地支配によるエキゾチシズムを表現しようとした。一方、本作は中島の『『文明』と『未開』、西洋と東洋、戦争の問題に対して自分の位置を問い直』（156頁）すための物語だった、という創作意図が本章で明らかにされる。

日本の女学校に留学経験があり、日本語も多少理解でき、「島民」の中では「極めてインテリ」であるマリヤンの形象は、そのインテリ性により「文明」と「原始」、または「開化」と「未開」の間の矛盾を示している。マリヤンは、帝国の「標準語」である日本語に訳された『英詩選訳』と『ロティの結

婚』を蔵書に持っていた。しかし「^{ウエスト}西洋」文化を植民地南洋へ持ち帰った彼女は、「島民」社会に許容されない「異例な存在」となった。著者は、中島自らの観察により成立したマリヤン像は、作家の代弁者である「私」にとって「問題的な存在であり続ける」（152頁）と、作品は主題が「文明と未開の混交」（155頁）に関連するのであるという結論を述べている。

第7章では、「中島文学の中期に表現される運命観」（161頁）が示されている「寂しい島」を解説する。中島の運命観は、その心境と繋がっている一方、物語の〈環境〉である自然描写と関わっているので、語り手の心境と自然描写との関連性を捉えようとする試みが、本章で注目される。さらに本章では中島が、「寂しい島」の文脈をめぐる考察に限らず、作品の舞台である島の叙述において、『最初の者』と『最後の者』の苦しみに触れた」（167頁）幻想性があると結論する。

補遺では、中島の日記、手帳やノートなどの史料を参照し、「古譚」所収の「狐憑」と「木乃伊」の構想期を推察している。脱稿時期が完全に確定できる資料は現存しないので、著者は作家の直筆書類である「手帳」と複数の「ノート」を検討し、〈南洋行後脱稿論〉はより妥当性があると推論する。

結章で著者が「極めてプライベートな人」（205頁）である中島について、その反植民地的な側面だけでその社会性をどの程度まで語りうるかという問題提起に対しては、作品から見て取れる植民地への眼差しから考察すべきだと回答されている。著者は中島は南洋小説において、「〈内〉と〈外〉のせめぎ合いに表現される己という居場所の定めどころのなさを捉えようと試みた」（214頁）と結論する。また中島の中期と後期の作品における〈社会〉は、植民地と強制収容所という「歴史と社会からみた〈例外状態〉と呼応する」（214頁）ことが、彼の文学における植民地支配への不服従という例外により発生したと指摘している。一方、中島の植民地における創作は、植民地体制・イデオロギー批判という独自性を深める役割を果たしたと認める。

総合すると、中島植民地文学をおもな研究対象とした本書は、研究対象の「個々の表現・モチーフ・構造を取り上げ、丹念に一つ一つ解釈していく緻密な読み」を行ったと楠井清文が評しているように⁵、作家の創作意識や世界観から造形した諸作品を一般論的な読解に拘らずに、植民地世界での他性という観点からそれぞれ分析し、中島文学における植民地イメージの系譜を呈示している。中島文学における他性を研究する時、どのように研究対象を選択

し、さらにどのような解説を行うかという問題に対し、著者は「植民地世界をある程度受容していた中島が残したテキストに拠」り、植民地体験に限定することなく、作家の人格が形成された成長期の様々な体験から、彼の〈内〉なる風景の複雑さを考慮に入れながら、作家論と作品論を結合し「中島の文学と人生」(215頁)を範囲とする研究を展開したといえるであろう。

本書の研究対象は、「単独ではあまり論じられなかった『ナポレオン』『夾竹桃の家の女』『寂しい島』を中心に構成している」と橋本正志が指摘しているように⁶、従来あまり注目されなかった南洋行を語った個別作から着手し、文脈における他性の在り方を理解しようとしている。一方、第4章で土方日記との比較的解説も、『満洲日報』⁷の記事から初期作品の「D市七月叙景(一)」(以下、「D市」)の成立を考える安福智行と同じく⁸、作家の植民地経歴の証左とする同時代史料を積極的に利用した有意義な研究法ではないだろうか。

しかし一方で、本書の枠組みを見ると、著者は点描的な視点で中島植民地文学の「南洋物」に重心を置いているが、「虎狩」以外の植民地を舞台とした初期作品⁹に含まれた植民地支配への抵抗を見落とす傾向があると考えられる。また昔の「外地」体験と比べ、南洋庁編修書記で勤めている中島の、普通の一宗主国民から植民地官僚へと社会的身分が転換したことによる創作心境の変化も、重要視すべきものではないかと考えられる。いずれにしても、研究の余地が大きい問題群の全貌を解明するために、著者の中島の初期作品に見られる植民地認識とその変貌を捉える更なる研究が期待される。

二、抵抗と植民地責任から考える他性

本節では、著者が論考している中島植民地文学における他性の問題と、評者の研究テーマである「満洲」文学の抵抗と植民地責任¹⁰との接合点を考察する。

近代日本の本土である「内地」とその植民地である「満洲」で生産した「満洲」を表象する文学は、帝国の支配権から成る植民地暴力に対する沈黙、さらに宗主国民と被支配者の立場から成る民族的ないしは階級的な不平等によって、作品の誕生から植民地責任を背負っていると考えられる。しかし、吉本隆明が批判しているような、積極的な対決から後退戦に移行し、ついに転落したという二段階転向を経たプロレタリア文学の芸術的抵抗が¹¹、プロレタリア思潮に影響された経験がある一部の「満洲」文学者の作品で存続した

可能性がうかがえると考えられる。そのため、結びつけられて論じてこなかった抵抗と植民地責任の在り方は、併存している可能性があるので、中島植民地文学を造形した他性の射程が、どのように中島文学の抵抗と植民地責任を広げたかという問題は、そうした可能性から再考すべきだと考えられる。

植民地責任と併存している抵抗の在り方は複雑な様相を呈している。吉本は芸術的抵抗論で、「封建性の異常に強大な諸要素」と「独占資本主義のいちじるしく進んだ発展」との同時対決における屈折が、プロレタリア芸術の挫折を誘致したと指摘している¹²。植民地文学の抵抗は、創作の要件となった植民地領有への受動的または能動的な屈従を礎にしている。そのため、直接対決を困難たらしめている植民地主義の反動性を含みつつ、植民地支配の実相のありのままの描写でアプローチしている場合が多く見いだせる。筆頭に挙げられる「満洲」文学者を例にすると、宗主国民側の日向伸夫¹³（「第八号転轍器」／1938）や牛島春子¹⁴（「祝といふ男」／1940）、そして被支配者側の古丁¹⁵（「新生」／1944）などのプロレタリア思潮に影響された経験がある創作者たちは¹⁶、「満洲」では植民地支配の正当性や民族間の関係に基づいた思索を旨に執筆しているが、〈内〉なる反植民地主義や民族自決主義の意識に影響される彼らの裏面に続く抵抗の軌跡が、それぞれの植民地体験を物語化した言説からうかがえるだろう。

前の議論を踏まえると、「面従腹背」と先行研究で指摘されてきた「満洲」文学の抵抗は、その「面従」により植民地責任を負いながらも、「腹背」における曖昧な不服従と考えられる。しかし、果たしてどれほどの抵抗を示しているか、さらに自己検閲で抵抗を形骸化する可能性があったのではないかなどの問題に対して、他性から探求できると考えられる。

著者は本書で、中島植民地文学で示されている他性は、植民地における他者の眼差しに注目することから生じたと論じて、その他性を次のように定義している。

植民地世界では、〈他性〉とは、現実に存在する異文化の場として経験しうるものではない。帝国というアイデンティティの境界線の彼方にある限りは単なる未知の他性であり、一方、境界のこちらにすなわちその内に飲み込まれては、単なる既知の、帝国という混合的な主体の延長に相当するものである。（74頁、傍点＝著者）

著者が述べる帝国というアイデンティティを境界線に、その彼方に未知の、その内に既知の他性は、サイドが指摘している物語における「姿勢と言及の構造 structure of attitude and reference」として、権威ある支配者の主体性により成立された¹⁷或いは拒否された表象との異同と比較しうるだろう。境界線を広げるとともに、未知の他性から既知の他性への変容が遂げられることを著者は示唆している。さらに、「木乃伊」の物語における「記憶と忘却のアンビヴァレントなせめぎあいに表象される〈追憶〉」(74頁)が、境界線上の場の存在の危機を晒すことに比べられると著者が指摘している。すなわち、支配者の主体性により物語の成立にもたらす影響が、この境界線により示されていると推測される。また、中島文学における安易に実体化できない様相を表すため、著者が alterity¹⁸の訳語を「他者性」ではなく「他性」を選んだと楠井が指摘しているように¹⁹、本書では帝国を境界線にして、〈他性〉を未知と既知に分けて扱っている。そこからは、人種と支配関係の問題をめぐって西洋対東洋、白人対非白人、自己対他者というオリエンタリズム構図と違い²⁰、作家の自他意識からその植民地物語における「姿勢と言及の構造」を探索する試みがうかがえる。

前述の抵抗論と植民地責任論から中島植民地文学における他性の立場を問い返すと、創作者の〈自己〉という中心は、支配と被支配、統治と服従の関係により相対的なものとなろう。ゆえに他性も、支配者と被支配者の相互関係により構築されてくると考えられる。例えば、「島民女」のマリヤンと宗主国民との間の、支配と被支配の関係による他性を浮き彫りにした「マリヤン」では、著者が指摘しているその『『文明』と『未開』、西洋と東洋』の対立が、支配権による優劣観により生成されている。しかし、「文字といふものが無い」パラオに許容されない「異例な存在」となった「コロール第一の読書家」のマリヤンの物語は、「島民」社会と「西洋」文化との疎遠、さらに宗主国の「文明」を受け入れたネイティブが他者化される不条理さを通して、支配者と被支配者の自他関係による文明間の鋭い対立のみならず、抵抗言説として成立している可能性が読み取れるだろう。

評者の中島文学研究では、初期作「D市」を中心に、物語における異種混濁の植民地社会表象に露呈した民族・階級間の格差と、失業苦力の植民地秩序に異議を打ち出したプロットに注目して、中島の「関東州」支配に対する

抵抗を解説した²¹。「プロレタリア文学に通じる要素を、中島敦の作品としてはもっとも多く持っている」作品だと川村湊が評している「D市」では²²、共棲する異民族・異階級の不平等が深刻化している植民地都市において、植民地支配に疎外された他者としての餓死寸前の苦力たちが、無銭飲食の〈罪〉により殴り倒されるという一齣を描写することで、植民地支配の合理性に疑問を投げかける抵抗が試みられている。

著者が論じている他性の区分けから「D市」を考えると、すでに帝国日本の植民地となった大連を眺める中島は「D市」の物語で、宗主国民の世界から判然と区別された被支配者の中国人の貧困、不潔と疾病を既知の他性として描き出していると考えられる。一方、他者として扱われた苦力の無銭飲食という犯罪を通じた抵抗は、帝国の植民地秩序への挑戦であり、植民地支配者が予想できない未知の他性と見なせる。

不況で「閑散期」に入ったために失業者となり、糊口の道を閉ざされた「出稼ぎ労働者」からなる苦力たちは、「D市」の第一部分では植民地権力者に「民衆」と区別された。彼らは、帝国に領有された母国の土地にいるが、宗主国民と同じように生存する権力は当然のように奪われており、帝国の延長と見なされない異質な存在であった。そのため、失業苦力は植民地「D市」では、生存の危機を切実に感じていただろう。さらに、この危機感からきた彼らの犯罪行為に対する、「一体、之以上の何が要らう？」という心理描写からして、彼らが改心する可能性は低いと判断できるだろう。それによって、著者が言及する他性の定義に従えば、抵抗からなる未知の他性は既知の他性に転換する可能性がある。しかし、帝国の植民地支配の境界線が広がるとともに、既知化した他性における植民地統治を乱す不確定要素が増えるのは必然であることが、「D市」物語における植民地批判の到達点ではないかと考えられる。

従って、宗主国民と異邦人というアイデンティティを保ったままの植民地作家の創作は、題材、発表時間や創作者の心境に影響された植民地支配に対する姿勢により、多種多様な植民地責任を負っている可能性を、他性の論点から再考すべきであると考えられる。

注

¹ 岡谷公二「パラオ好日—土方久功と中島敦」（『新潮』99、2002年5月）133～163頁を参照。

² 著者は本章で、「ミクロネシア（限定的で現実的なそれ）、さらに『南洋』（拡大的で空想的なそれ）を代表する日本文学の個々のテーマに向かうアプローチをとり、南洋表象の構築に関与する複数のモチーフ」（33頁）と「千冊」の意味を説いている。

³ Nobuko I. Yamasaki, *Prostitutes, Hostesses, and Actresses at the Edge of the Japanese Empire*. (Routledge, Jun. 2021) p.13を参照。

⁴ 「土方久功アーカイブ」<https://nsearch.minpaku.ac.jp/hijikata-archives/hijikata.html>による（2023年9月27日最終確認）

⁵ 楠井清文「書評 ボヴァ・エリオ著『中島敦文学論：植民地と他性』（『日本文藝學』58、2023年3月）185頁。

⁶ 橋本正志「植民地が舞台の作品に描かれた『自己』認識のありようを追究」（『図書新聞』3585号、2023年4月1日）

⁷ 1907年11月『満洲日日新聞』の名で大連で創刊した日本語新聞。1927年11月『満洲日報』と改題。1935年8月『満洲日日新聞』に戻す。1944年4月新聞統合より再び『満洲日報』と改題。敗戦後に廃刊。

⁸ 安福智行「『D市七月叙景（1）』論—『満洲日報』を視座として—」（『京都語文』8、2001年10月）70～85頁を参照。

⁹ 例えば、朝鮮を舞台とした「巡查の居る風景—一九二三年の一つのスケッチ」（1929）「プールの傍で」（1932以降）、「関東州」を舞台とした「D市七月叙景（一）」（1930）など。

¹⁰ 中島敦文学と抵抗を論じた先行研究の一例を挙げると、王新新は、「中島敦の『抵抗』は、戦争に協力せずに、または戦争を無視し、あるいは遠ざかる意味での『抵抗』である。〔中略〕『戦争は戦争、文学は文学』だと主張している中島敦の『抵抗』は、結局のところ極めて有力な抵抗ではない（中島敦的“抵抗”、是不協作戦争、或無視戦争、遠離戦争意義上の“抵抗”）。〔中略〕主張“戦争是戦争，文学是文学”的中島敦的“抵抗”到底不会是極有力的）」と批判している一方、その抵抗は「戦争という困難な時代の流れの中で、文学の追求に執着することで、脆弱な日本文壇に対する不満を表している。無力だったとはいえ、インテリとしての良知を表した（通過在戦争悪流中对文学的执著追求表達着对脆弱的日本文壇的不满，雖嫌無力，却表現了知識分子的良知。和訳＝評者）」と戦時中の中島敦文学の抵抗を評している。（王新新「中島敦与日本戦時文学『芸術抵抗派』」（『吉林大学社会科学学報』3、1999年3月）67～68頁）

一方、近年の植民地責任をめぐる研究動向の一例を挙げると、川島真は、「東アジア現代史の特質を踏まえるべき 植民地責任と歴史認識をめぐる、日本の戦後知識人が戦争責任、植民地責任をめぐる議論を行う際に、当事者であるはずのかつての植民地の知識人と必ずしも一緒に議論してはいなかったこと」は、「集团的『忘却』につながる」と批判している。（川島真「東アジアにおける『植民地責任』を考える」（『学術の動向』27、2022年12月）70～71頁）

¹¹ 吉本隆明は「民主主義文学批判」（『吉本隆明全著作集』4〈勁草書房、1969年4月〉119頁）で、次のようにプロレタリア文学運動の挫折の二つの段階を定義している。

前期は、いわば弾圧によって、運動史的な欠陥をつかれ、孤立し、後退し、転向していった過程であり、後期は、かつてプロレタリア文学最盛期に習いおぼえた腕っぷしと理論をつかって権力に迎合し、その文芸政策を合理化した積極転向の過程である。

前期の転向は、小林多喜二の専制主義による虐殺に象徴されるように、弾圧がその主要原因であり、後期は、これを権力の弾圧にきすることができず、いわばプロレタリア文学運動自体がもっていた文学理論、実作、組織論、の欠陥が自己転回して再生産されていった過程である。

したがって、前期転向は「良心に反して」おこなわれ、後期転向は「良心に従って」おこなわれた、等々。

¹² 吉本隆明「芸術的抵抗と挫折」（『吉本隆明全著作集』4、勁草書房、1969年4月）158頁。

¹³ 日向伸夫（1913～1945）は、京都出身。本名は高橋貞雄。『作文』同人。1936年「満鉄」に就職し、ハルビン駅に勤務する。1941年短編小説の「第八号転轍器」（『作文』初出、短編小説集『第八号転轍器』（砂子屋書房、1941年5月）に収録）が第13回芥川賞候補となる。1943年1月帰国し、1945年4月沖縄で戦死。（天野真美「日向伸夫試論——日本人の『満洲文学』の一位相」（『社会文学』7、1993年7月）144～155頁を参照）

¹⁴ 牛島春子（1913～2002）は、福岡久留米出身。若い時は労働運動に専念し、1932年共産党に入党する。翌年逮捕され転向を強いられる。1935年懲役2年執行猶予5年との判決が下される。1936年夫の牛嶋晴男と渡満し文学創作をはじめ、1940年短編小説の「祝といふ男」（『満洲新聞』夕刊1940年9月27日～10月8日初出）が第12回芥川賞候補となる。（林雪星「牛島春子と『満洲文学』とのかかわりについて」（『跨境：日本語文学研究』2、2015年6月）125～143頁、蘇昊明「牛島春子の『満洲国』時代——『二太々の命』、『女』を中心に——」（『文学研究論集』59、2023年9月）63～74頁を参照）

¹⁵ 古丁（1914～1964）は、吉林長春出身。本名は徐長吉（徐突微、徐汲平とも）、筆名は古丁、史之子など。満州事変の後、1932年北京大学に入学し、翌年中国左翼作家聯盟北方部（北方左聯）に加入するが、7月逮捕され休学し「新京」に戻る。1937年から『明明』『芸文志』の創刊に力を入れて、「満系」作家の代表的な一人として執筆活動を活躍し、1941年書店兼出版社の芸文書房を立ち上げる。短編小説集『奮飛』（月刊満洲社、1938年5月）、長編小説『平沙』（満日文化協会、1940年11月）などの作品がある。1944年長編小説の「新生」（『芸文志』第1巻第4号〈芸文書房、1944年2月〉）初出、1945年6月芸文書房より単行本化）が第3回大東亜文学者大会で次賞を受賞。（劉曉麗「錯置の啓蒙主義者——偽満洲国時期作家古丁論」（『現代中国文化与文学』1、2018年5月）12～23頁、梅定娥「古丁研究：「満洲国」に生きた文化人」（国際日本文化研究センター、2012年3月）13～71頁を参照）

¹⁶ 例えば日向伸夫の場合は、随筆の「暮春日記」（『辺土旅情』（北陵文庫、1943年5月）242頁）で、「社会思想にかぶれ」た経歴を次のように述べている。

最後に会ったのはたしか満洲事変の年だったと思ふ。肋膜炎で入院してゐ

る自分を夏休暇に東京から帰つて見舞つてくれたのがそれで、当時大分社会思想にかぶれてみた自分と激しく口論して別れたのを覚えてゐるが、それつきりで音信不通となり、十一年間絶えて会ふことがなかつた。

¹⁷ エドワード・サイード著 大橋洋一訳『文化と帝国主義』2（みすず書房、2001年7月）6頁。

¹⁸ ランダムハウス英和大辞典によると、alterity は、「*n.* 他者であること；他のものであること、別であること（otherness）」と意味している。（小学館ランダムハウス英和大辞典第二版編集委員会編『小学館ランダムハウス英和大辞典』第2版〈小学館、1994年1月〉81頁）

¹⁹ 楠井清文、前掲書評、183頁。

²⁰ 有満保江「文学にみる他者性——日本とオーストラリアの場合」（『東京大学アメリカ太平洋研究』14、2014年3月）62頁を参照。

²¹ 拙稿「中島敦文学における抵抗と『関東州』社会表象の研究 —『D市七月叙景（一）』を中心に—」（広島大学修士学位論文、2023年1月）、「中島敦『D市七月叙景（一）』論—異種混淆の植民地表象を中心に—」（『近代文学試論』61、2023年12月）を参照。

²² 川村湊『狼疾正伝 中島敦の文学と生涯』（河出書房新社、2009年6月）58頁。

付記

拙評の執筆に当たり、指導教員の中村平先生に貴重な御意見を御寄せ頂き、厚く御礼申し上げたい。また大連民族大学外国語学院の野崎晃市先生に丁寧な御校閲を頂き、心から感謝の意を表したい。

なお、引用文中の略・註は、すべて評者によるものである。引用の際、旧字を適宜新字に改めた。